山梨日日新聞　昭和58年（1983年）2月28日　月曜日

今週の話題

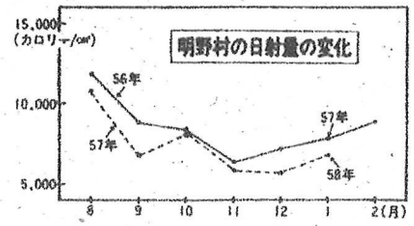
「太陽の村」も日射量減る

明野中で観測

太陽から直接地上に届く日射量が、例年に比べて全国的に減少している。この気象庁の観測を裏付けるデータが、北巨摩郡明野村で太陽観測を続けている明野中気象観測委員会（中田新介校長、深沢泉委員長）の日射量分析で明らかになった。日射量減少の原因は、昨年三月に噴火したメキシコ・エルチチョン火山の火山灰が地球の成層圏を覆ってしまうため、といわれているが、ちょうど今が太陽の黒点の減少期に当たっていることも一因らしい。これらのデータを総合的に分析すると、「ことしの夏も冷夏。農作物は昨年並みか、それ以上の冷害になるかもしれない」という。明野中気象観測委員会の観測結果と、冷夏予測を紹介しよう。

心配される冷夏、冷害

気象庁のデータと一致



日射量が例年に比べて減少している、と発表したのは気象庁測候課。それによると、日射量減少量は前年比二〇%。エルチチョン火山の大気への影響が原因、とみている。日射量がこれほど大きな減少を示したのは気象庁の観測史上、例がない。同庁はこの減少が、今後の気候と農作物に対して影響する恐れがある、とみている。

同庁の観測は、昨年十一月から減少傾向を示している。

休みなく計測

明野中気象観測委員会は五十五年四月に発足した。委員は十二人。顧問は同中で理科を担当する口野道男教諭。同村は茅ケ岳山ろくの南に面した緩やかな斜面上にある。雨量は少なく、太陽の日照時間は日本で一番長いことで知られる。観測は同村が設置した計器で行っている。日射量は、太陽から直接地上に届く直達日射量と、大気中の浮遊粒子でいったん散乱されて地上に届く散乱日射量の合計を、休みなく計測する。こうして一分間に一平方㎝当たりの地面に届く太陽熱をカロリー単位で表示する仕組みだ。

日射量観測などをする明野中気象観測委員会の生徒たち　＝北巨摩郡明野村上手で

観測データによる五十六年八月から五十八年一月までの変化を表にしてみると、五十六年八月から五十七年一月までの日射量変化は、十一月を最低にしたV字型を描いているのに対して、五十七年八月から五十八月一月までの日射量変化は、九月と十二月を最低にしたW字型の波形を示している。口野教諭は「W字型は典型的な異常気象を示している」という。

さらに十二月だけを注目すると、五十七年の日射量五八五二㌍（一平方㎝）は、五十六年の七一六五㌍より、一三一三㌍、二二%も少ない。五十五年は七〇三三㌍で、やはり五十七年十二月が異常減少していることを示している。

明らかに異常

気象庁の発表のように、日射量減少が昨年十一月から異常さを示している。日射量がこれほど大きな減少を示したのは気象庁の観測史上、例がない。同庁はこの減少が、今後の気候と農作物に対して影響する恐れがある、とみている。

同庁の観測は、昨年十一月から減少傾向を示している。

休みなく計測

明野中気象観測委員会は五十五年四月に発足した。委員は十二人。顧問は同中で理科を担当する口野道男教諭。同村は茅ケ岳山ろくの南に面した緩やかな斜面上にある。雨量は少なく、太陽の日照時間は日本で一番長いことで知られる。観測は同村が設置した計器で行っている。日射量は、太陽から直接地上に届く直達日射量と、大気中の浮遊粒子でいったん散乱されて地上に届く散乱日射量の合計を、休みなく計測する。こうして一分間に一平方㎝当たりの地面に届く太陽熱をカロリー単位で表示する仕組みだ